



北国の暖房

品田 聡 有限責任中間法人
日本エレクトロヒートセンター 理事

私は昭和32年に北海道の釧路市で生まれ、小学校2年生の時までそこに住んでいました。当時、釧路には三井財閥系の太平洋炭礦がありましたが、戦後の復興期で石炭の需要も多く、ヤマを中心に活気のある時代でした。その頃の燃料と言えば石炭が主流で、暖房にはルンペンストーブと呼ばれる石炭を燃やすストーブが使われていました。当時の住宅の断熱性能（そんな言葉すらなかったと思いますが…）は今では考えられないようなお粗末なものでした。冬には窓をビニールで目張りをしていましたが、厳寒期には家の中でも氷が張ることがありました。当然、今のようにはテレビゲームもなく、子供たちは毎日暗くなるまで屋外で遊んでいました。冬は毛糸の手袋やゴム長靴がびしょ濡れになり、家に帰ってきて冷え切った手足をストーブで温めたものです。そのため、冬の間は常に居間の真ん中でストーブが赤々と燃えていたように記憶しています。

小学校では大きな鑄鉄製のストーブでコークスを燃やしていましたが、特に寒い朝などは広い教室が十分に暖まらないのでストーブの廻りに集まって、暖を取りながら授業を受けたこともありました。この原稿を書くにあたり冬の暖房に関して子供の頃の記憶をたぐってみると、家族の団欒や教室での楽しい思い出などが浮かんできて、改めて暖房がいろいろな場面で生活と密接に結びついていたことを感じました。

一方、ビルのような大きな建物は重油ボイラーによる温風暖房が主流だったようです。今では北海道でも冷房は当たり前になりましたが、私が子供の頃は冷房などほとんどなく、事務所などにクーラーが設置されだしたのはかなり後になってからです。最近では建物の断熱性能やヒートポンプの性能が向上したため、北海道でも1台の機械で暖冷房が可能になりました。これによりコストや環境面での優位性が高まり、多くのお客さまにヒートポンプを採用していただいております。また、空調方式も以前のように建物一括ではなく、部屋ごとに個別に温度調整ができるタイプのものが主流になり、より環境と省エネに寄与するものになりました。今年7月に開催された北海道洞爺湖サミットの国際プレスセンターでも使われましたが、雪を利用して冷房や農産物の貯蔵を行うなどの新たな取り組みも行われています。

北海道以外の地域の方には“北海道の人は冬でも暖房の効いた部屋で半袖のシャツ一枚でビールを飲んでいる”と思われているようです。確かに寒い戸外から帰った時、家の中が暖かいとほっとしますし、特に我々の世代は小さい頃に寒い思いをしたので、暖房の温度を高めにする傾向があるのかもしれませんが。

しかし、省エネや環境問題を考えると、我々北海道民も暖房に対する考え方や生活のスタイルを変えなければならない時期であり、当社もヒートポンプ機器を中心とした環境に優しく省エネ効果の高い電化システムを提案させていただくことで、そのお手伝いをできればと思っています。

(しなだ さとる) 北海道電力(株) お客さま本部 営業部 部長